

**主 題：感謝の人生・実践編：兄弟姉妹に対して8**  
**聖書箇所：ローマ人への手紙 12章13節**

パウロは私たちが目標とするべき「愛」について説明をした後、私たちイエス・キリストを信じる者たち、クリスチャンたちが実践するべき「愛」の具体的な形を説明してくれています。どれ程ことばで愛を語っても実践しなければ何の役にも立たないと言います。そこでパウロは12章の中で愛の実践について教えます。私たちがどのように「愛」を具体的に実践していくべきか、その例を上げて、私たちに教えてくれるのです。特に、私たちが見て来ている10節から13節の中では、教会にあって兄弟姉妹との関係においての「愛」について教えています。あなたは教会にあってこのように生きるべきだ、教会にあってこのように兄弟姉妹に愛を示していくべきだと。もちろん、神に対する愛もあります。愛の人であるあなた、愛をいただいたあなたは教会にあってこのように愛を実践すべきであると、パウロは10項目上げています。

**B. 愛の実践：兄弟姉妹との関係において 10-13節**

**1. 兄弟愛をもって心から互いに愛し合いなさい 10節**

教会にあって私たちは兄弟姉妹であり、神の家族に属する者である。だから、親子の愛のような、肉親間の愛のような愛をもって互いに愛し合いなさいと言います。

**2. 尊敬をもって互いに人を自分よりも勝っていると思いなさい 10節**

互いに尊敬しなさい、人が自分よりも優れている、また、人を自分よりも高く評価するように、そのように歩みなさいと言ったのです。結局、私たちの問題はプライドです。だれが上に立つのかということ私たちが競うのです。主の教えは「自ら進んで低くなりなさい」です。主ご自身がそのように歩まれたからです。尊敬をもって自分よりも勝っていると思いなさいと。

**3. 勤勉で怠らず 11節**

もちろん、この三つ目の「勤勉」も次の「霊に燃える」ということも「主に仕える」ことを具体的に教えている訳です。勤勉でありなさい、主のために働ける時間、主に仕えることが出来る時間が短くなっているからと。もちろん、私たちは若いからといって明日のことは分かりません。主に仕えることが出来るのはこの地上だけです。その時間が段々短くなっているから勤勉であれと言います。

**4. 霊に燃え 11節**

私たちのうちの聖霊なる神が燃やされて私たちが働きを為すようにと言います。そのためには私たちはいつも自らの心を吟味して罪を除いていかなければいけないのです。罪があるなら聖霊は働くことができないと見て来ました。

**5. 主に仕えなさい 11節**

そうして私たちは主に仕えるのだ、私たちは主の奴隷だと言います。喜びをもって感謝をもって、恐れをもって仕えて行きなさいと。何事をするにもすべてのことを主の奴隷として、主人である主を喜ばせるために為していきなさいと言います。

**6. 望みを抱いて喜び 12節**

パウロは私たちに教えてくれました。「クリスチャンたちよ、兄弟姉妹たちよ、いつも喜んでいなさい、なぜなら、あなたはいつも喜ぶことができるから。」と。間違っているところを見ているなら、私たちは悲しいことに、その実現を見ることはありません。しかし、私たちが「希望において」とパウロが言ったように、私たちに与えられている希望を見るなら、私たちは主が備えてくださった喜びをもって生きることができます。主は私たち信仰者のためにすばらしい約束を用意してくださっています。あなたは主にお会いするのです。顔と顔とを合わせて、私たちは私たちの主を拝することができます。私たちの罪のからだは贖われます。私たちが待望している完全な義、聖さが与えられます。私たちは栄光のうちに招かれます。永遠のいのちをいただいて我々は永遠を主と過ごすことができます。皆さん、主はこのような祝福をイエス・キリストを信じる私たちに備えてくださるのです。そこに目を向けなさいと言うのです。なぜなら、周りの人々は人間的に見てどんなにすばらしい生活を、羨ましいほどの生活をしていても、この祝福をもっていなければそれは虚しいものだからです。人間的に何も自慢することがないのが私たちです。でも、私たちには自慢することがあるのです。私たちのうちには自慢する主がいるのです。あなたに与えられたそのすばらしい祝福、希望をしっかりと見ていなさいと言うのです。そのときに主があなたに喜びをくださるのです。

## 7. 患難に耐え 12節

確かに、私たちは信仰者としてこの地上を主の前に忠実に生きて行こうとすると、様々な困難があります。いろいろな苦しみを経験します。いろいろな試練があります。でも、その中であって主の約束に信頼を置きなさいと言うのです。主があなたの信仰の成長のためにそれを与えてくださっているからです。だから、どんな時にでも主の約束をしっかりと覚えて、その主の約束に信頼を置いて、主ご自身に信頼を置いてあなたが歩んで行くなれば、あなたは喜びをもって歩んで行くことができますのです。そのような信仰者が必要です。どんなときにも主の喜びをもって生きる者たち、どんなときにも喜びの源である主が生きておられることを世に現わす、そのような信仰者が必要です。主はあなたも私もそんな働き人に変えてくださるのです。

## 8. 絶えず祈りに励みなさい 12節

祈りの人になりなさい、どんなときにも祈る人になりなさいと言います。このように言えます。祈りに励んでいる人は主を愛している人です。なぜなら、愛する人との時間は楽しいものだからです。主を愛しているからその方との交わりを喜んでいます。いつでも祈りたい、どんなときにも祈りたいと祈り続けている人は、まさに、主を愛している人です。また同時に、祈りの人は隣人を愛している人です。なぜなら、見て来たように、祈りは人々のための執り成しでもあるからです。隣人を愛するから、その人たちのことをいつも思っているから、彼らのことをいつも主の前に執り成すのです。ですから、こうして見たときに、確かに、祈りの人は主を愛する人であり、そして、隣人を愛する人です。

今回、私たちが見るのは最後の13節のみことばです。残りの二つを私たちはここに見ます。「愛の実践」の残された二つです。このように愛を実践しなさいと教えます。

## 9. 聖徒の入用に協力しなさい 13節

ご存じのようにクリスチャンたちのことです。聖徒と呼ばれている者は、罪が赦されて主の前に清められた人だからです。聖徒のその必要に協力をするようにと言うのです。この「協力し」ということばは面白いことばが使われています。「仲間になる、助けるためにその人に関わる」という意味です。実は、このことばの名詞形は、皆さんもよくご存じです。「コイノニア」というギリシャ語です。つまり、仲間になる、交わり、親身な関係をもつ、もちろん、援助をする、寄付をするなどという意味をもったことばです。特に、皆さんは「コイノニア」、「交わり」ということで、このことばをご存じかもしれません。

また、ここで訳されている「協力しなさい」ということばは、他の箇所ではこのような意味で訳されています。ガラテヤ6：6「みことばを教えられる人は、教える人とすべての良いものを分け合いなさい。」、「分け合いなさい」、ピリピ4：15では「ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。」、「物をやりとりしなさい」、Iテモテ5：22では「また、だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持ってはいけません。自分を清く保ちなさい。」、「関わりをもちなさい」と訳されています。ですから、パウロがここで教えたことは、すべての人々の必要に敏感であって、それらに答えて行こうとしなさいということですが、特に、兄弟姉妹たちに対して、教会の中であって、同じように主を愛する人たちに対して、彼らの必要を満たすために努めなさい、そのために励みなさいと教えるのです。

先ほども話したように、必要は多岐に渡ります。特に、教会の中であって、物質的必要を覚えている人たちの必要に答えて行きなさいと言うのです。確かに、初代教会のクリスチャンたちはそのように生きました。彼らは兄弟姉妹たちの必要に対して喜んで自らの持ち物をささげて、それを使って彼らの必要に答えて行きました。使徒の働き2章44節、また、45節にはこのように記されています。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。：45そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」と。また、使徒の働き4：32にも「信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。」とあります。初代のクリスチャンはこのように生きたのです。そして、パウロはそれをローマのクリスチャンたちにも教えたのです。そして、みことばは私たちにも同じチャレンジを与えるのです。

正直、感謝なことに、私たちのこの群れの中であって多くの教会員の皆さんがこのことを実践しておられます。本当に感謝なことです。惜しみなく犠牲的に主にささげている方がたくさんおられます。人々の必要のために喜んで犠牲を払おうとする人たちが与えられていることは本当に感謝なことです。しかし、実際に、自分の持っているものを、それがお金であろうと財産であろうと、必要を覚えている人たちのために喜んで犠牲にしよう、喜んで主に犠牲的にささげようということにはかなりの決心が必要だということも分かっています。易しいことではないです。しかし、聖書の教えを見るならば、その

ように喜んで主にささげる者たち、犠牲的にささげる者たちには大きな祝福、永遠の祝福が約束されています。私たちもそのことを知っているのです。知っていながらなかなかそれを実行できないのは、私たちの理解に問題があるからです。私たちが持っているお金や財産など、それらの持ちものに対する理解に少し問題があるからです。私たちがそのことを正しく知ることが必要です。

今から、イエスがお語りになった二人の人物の話からこのことについて考えていきます。主イエス・キリストはそのことを人々に、また、弟子たちに教えようとなさいました。私たちもそのレッスンを学びましょう。

### ◎お金や物、財産などに関する主イエスの教え

私たちはこれらをどのように捉えればいいのでしょうか？今から見ようとするものの一つは「金持ち」の話です。もう一つは「不正な管理者」の話です。

#### 1) 金持ちの話 ルカ 12 : 16 - 21

ルカの福音書 12 章にこの話が出て来ますが、どちらかと言うと「愚かな金持ち」と言うことができます。「:16 それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』:18 そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」、皆さんもよくご存じの話です。主がお語りになったたとえです。この出来事を整理します。非常に裕福であったこの人物の畑が豊作であったと言うのです。そして、彼は収穫物を貯蔵するために、今のものより大きい倉が必要だ、今の倉では納めきれないからと、彼は倉を作って、そこに収穫と財産のすべてを納めたと書かれています。これがイエスが語られた内容です。

この話を考えたとき、豊作で収穫物をどこかに納めなければいけないから大きな倉を建ててそこに納めたと、いったいどこに問題があるのでしょうか？私たちが普通にする事です。しかし、このたとえを見ると、主はこのように言われるのです。20節「しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』」、主なる神はこの金持ちに対して「おまえは愚か者だ」と言われたのです。なぜでしょう？なぜ、この人物が愚か者なのでしょう？実は、その理由が17節から19節に書かれています。残念ながら、私たちが手にしている日本語の聖書ではそれが明確に記されていません。ですから、私はこの箇所を私訳ですが、訳したものを読みますから皆さんは目で追ってください。「:17 そして、彼は自分自身で考え始めた。『私は何をすべきだろう？なぜなら、私には私の穀物を私が蓄えておく所がない。:18 そして、私はこれこれをしよう。』と彼は言った。『私は私の倉を壊し、そして、私はより大きな倉を建て、私はそこにすべての穀物と私の財産を蓄えよう。:19 そして、私は私のたましいに言おう。たましいよ、これから何年分もの多くの財産が蓄えられた。安心して食べて飲んで、そして、楽しもう。』」と。今、敢えて強調して読んだのでお分かりになったと思います。ここには「私」、「私の」ということばが溢れています。「私」ということばが8回、「私の」ということばは4回も出てきます。

つまり、このたとえ話が私たちに明らかにするのは、どうして、この金持ちが愚かだったのか？それは、彼が利己的な人物だったということです。自分のことしか考えていなかったのです。この人物の間違いは、(1)すべては自分のものであると思っていたことです。「私のもの」、(2)また、彼はすべては私のために使うものだと思っていました。「安心して、食べて飲んで楽しもう、これは私のものだ、私の好きなように使って、私が楽しむのだ」と言います。(3)また、すべては自分の思い通りになると考えていました。「これから先何年も」自分は生きていると思っているのです。これから自分の思い通りになってゆくと思っているのです。

**結論**：これらのことから、次のような結論が引き出せます。

#### (1) 彼は神を知らない

彼は神を知らないのです。なぜなら、豊作をもたらされた神への感謝が全く出ていません。彼が知らなければいけないことは、豊作をもたらしてくださり、こんな祝福を与えてくださった神に感謝をすることです。神を知っている人なら感謝します。彼は全くそれをしていません。神を知らないからです。

#### (2) 彼は与えられた目的を知らない

二つ目に言えることは、彼はそれらが与えられた目的を知らないことです。ですから、その結果、彼は神に感謝しないだけでなく、それらを神のために用いようとも考えていません。彼が考えていたのは自分を楽ませるために用いることだけです。食べて飲んで楽しもうと。彼は自分を楽ませる生活、自分を喜ばせる生活をして来たのです。遊んでパーティを開いて好きなことをして、楽しければそれでいいと、そのような生き方をしていたのです。そして、彼自身、自分のたましいにそう言ったのです。

「これから先も楽しく生きていこう」と。なぜ、そのような豊作が、なぜ、そのようにすばらしい財産が彼に与えられたのか、彼はそのことを全く知りませんでした。すべては神のものであり、神が彼に託したものだのです。

ダビデ王は、自分の子であるソロモンがこれから王になっていくというそのときに、ソロモンが神殿を建てることを彼は知っていました。そこでダビデは、神殿を建てるために、自分のありとあらゆる物を主の前にささげるのです。そして、彼はイスラエルの民にそのことを命じるのです。すると、彼らも同じように物を持って来て、それを主の前にささげました。そのことが歴代誌第一29章に出ています。ダビデは全集団の目の前で主をほめたたえてこのように言いました。29：10-19「10 ダビデは全集団の目の前で主をほめたたえた。ダビデは言った。「私たちの父イスラエルの神、主よ。あなたはとこしえからとこしえまでほむべきかな。11 主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのもので。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。12 富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです。13 今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。14 まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者なのでしょう。このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても。すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。15 私たちは、すべての父祖たちのように、あなたの前では異国人であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。16 私たちの神、主よ。あなたの聖なる御名のために家をお建てしようと私たちが用意をしたこれらすべてのおびたしいものは、あなたの御手から出たものであり、すべてはあなたのものです。17 私の神。あなたは心をためされる方で、直ぐなことを愛されるのを私は知っています。私は直ぐな心で、これらすべてをみずから進んでささげました。今、ここにいるあなたの民が、みずから進んであなたにささげるのを、私は喜びのうちに見ました。18 私たちの父祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。御民のその心に計る思いをとこしえにお守りください。彼らの心をしっかりとあなたに向けさせてください。19 わが子ソロモンに、全き心を与えて、あなたの命令とさとしと定めを守らせ、すべてを行なわせて、私が用意した城を建てさせてください。」、今、見たように、11節に「天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのもので。」とあり、12節にも「富と誉れは御前から出ます。」と言いました。14節にも「すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。」と。ダビデがささげたすべてのもの、「実は、これは私のものではなくて、神さま、あなたのものです。私はささげたにすぎません。」と言うのです。16節にも「あなたの聖なる御名のために家をお建てしようと私たちが用意したこれらすべてのおびたしいものは、あなたの御手から出たものであり、すべてはあなたのものです。」と述べています。

ダビデ自身は大切なことを知っていたのです。彼が持っているすべての富は、実は、神のものだと。先ほどの愚かな金持ちは自分の持っているすべてのものは自分のものだと思っていたのです。だから、自分のことしか考えなかった。しかし、ダビデは自分の持っているものは神のものであり、神が託してくれたもの、だから、彼は喜んで神の前にお返ししているのです。違いが分かりますね。愚か者は、託されたものなのに自分の所有物と思い込んでいるのです。「自分が稼いだのだから、自分が努力して得たのだから、これは私のものであり私のために使うのだ。」と、だから、彼が計画することは「どうして楽しもうか、どうしたらもっと自分を楽しませることが出来るのか？もっと良いものを買って、こんなふうに過ごして…、自分のお金を自分の楽しみのために使おう。」です。

ダビデのことばは違いました。神から託されたものを神のために使おうとします。これが神の前に愚か者と賢い者との違いです。私たちが覚えなければいけないことは、あなたが持っているすべてのもの、それは実は主のものであり、主からお預かりしているものだということです。主はあなたにお金であったり、財産であったり、物などを託してくださったのです。なぜ、そのようになさったのですか？それは、それらを主のために、主の栄光のために、また、人々の益のために用いるためです。ですから、今日私たちが見ているローマ人への手紙でパウロが命じたことは「聖徒の入用に協力し」なさいです。そのために神があなたに託してくださっているのです。だから、それをその目的のために使いなさい、主が託したものは主のみこころに沿って用いるようにと、みことばはそのことを私たちに教えているのです。

だから、まず私たちが学ばなければいけないことは、こうして私たちがいただいているもの、富や財産、私たちの健康もそうです。時間もそうです。我々のいのちもすべてそうです。私たちは自らのいのちを神の栄光のために使う、時間も神の栄光のために使う、それなら、我々に与えられている持ち物も同じです。すべて主が我々に託してくださったものです。

もう一つ付け加えておきます。この愚かな金持ちは今私たちが見て来たように、神を知らないだけでなく、それが与えられている目的を知らないだけではありません。

### (3) 彼は清算の日が来ることを知らない

自分が死ぬということを全く忘れています。これから数年は確実に生きると思っていました。それが問題なのです。私たちには明日のことが分かりません。ですから、我々が主のために生きるのは、ひょっとしたら今日が最後かもしれない。そのような思いをもって今日を生きたいものです。主イエスはこのたとえを用いて、この愚かな金持ちの愚かさをこのように言われました。21節「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」、この人物の愚かさは彼が地上のことしか考えていなかったことだと言います。賢い人は、その先があることをしっかり見ています。その先に対する備えをもって今日を生きています。

#### 《考えましょう!》

皆さん、我々が死を迎えたときに、我々は自分の持っているすべてのものをこの世に置いていきます。私たちの富や財産を天国に持っていくことができないのは皆さんよくご存じです。ということは、私たちが後生大事に思っている物はこの世の物であって永遠に残る物ではないと言うことです。つまり、私たちが持っている物、大切にしている物は永遠に価値ある物ではないのです。この世においてのみ価値があるのです。なぜなら、永遠に残らないものに永遠の価値があるはずがありません。私たちはそれらをみな地上に置いていくのです。ということは、置いていく物はこの地上にいる間に用いなければいけないのです。ですから、主はこの地上での生活においてそれらを主のために正しく用いることを命じておられるのです。「わたしがあなたに託したものを、あなたがこの地上にいる間に正しく賢く用いなさい。わたしのためにそれらを用いなさい。」と。それらを用いて、必要がある兄弟姉妹の必要に応じて行きなさい。あなたがそのことを実践するなら、主によって約束されていることは「あなたは天に宝を積むことになる」と言います。つまり、神があなたに託してくださったものを神のみこころに沿って用いるなら、それはあなたが地上ではなくて天に宝を積むことになる。

主イエスは、個人の宝に関して「山上の説教」の中でこのように教えておられます。マタイ6:19-24「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。:20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。:21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。:22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、:23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。:24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」、みことばは私たちに「あなたはどこに宝を積みますか？また、積んでいますか？」と言うのです。この地上に積んでいるのか、天に積んでいるのか？地上に積んでいる人たちはこのような人たちです。見て来たように、今のことしか考えない、自分のことしか考えません。そして、自分に託されたものは全部自分のものだから、自分が死ぬまでにそれらを使って楽しく…と。確かに、そのような人もいます。しかし、天に宝を積んでいる人はすべては神から託されていることをしっかり覚えて、神のために使おうとするのです。

#### 2) 不正な管理人 ルカ16:9-13

もう一人の人を見ましょう。ルカ16章です。1節から見て行きます。「イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。」と、このような話が記されています。2節「主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』とこんなことを言われました。そこでこの管理人はこのようなことを考えたのです。3-8節「管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、こじきをするのは恥ずかしい。:4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』:5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか。』と言うと、:6 その人は、『油百バテ。』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい。』と言った。:7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか。』と言うと、『小麦百コル。』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい。』と言った。:8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。」、この管理人はなぜこのようなことをしたのでしょうか？みことばが教えています。「仕事を辞めさせられても、このようにその人のために何かをしておけば、その人が私を彼の家に呼んでくれるに違いない。行く所がなくなっても、私が世話をした人、私が彼らのために借金を減額して恩を売ったら、彼はきっと私を自分の家に迎えてくれるのに違いない。」と。このようなことをイエスは話されたのです。このことはよく分かります。不正な管理人が何を考え、何をしたのかが明確に記されていました。

彼は自分の将来のことを考えたのです。仕事を失って行くところもなくなったとき、今、恩を売っておけばだれかが自分を迎え入れてくれるだろうと。大切なことは、9節から記されているイエスが言われたことです。

9節を見てください。「そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」「不正の富み」とはお金や財産など、今私たちが見て来たことを指しています。「不正」とあるのは不正を働く人が多いからです。実際に、今私たちが見ているこの話でも、管理人は不正を働いていたのです。「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」と、こんなことを主が教えられたのです。この管理人は借金を調整することによって、この地上で自分を迎え入れてくれる友を作ろうとしたのです。イエスが言われたことは、その富を用いて、お金を用いて、財産を用いて、天国であなたを歓迎してくれる友を作りなさいということです。地上の話と天国の話がここでなされているのです。「天においてあなたを歓迎してくれる友をこの富を使って作りなさい。」とは、どういうことでしょうか？福音宣教のことです。罪人の救いのために、あなたがその富を用いるなら、それによって救われた人たちは、あなたが天に凱旋するときに彼らがあなたを歓迎するということです。つまり、この人物は自分がこの地上において住む所を得るために富を用いたのです。借金を調整した訳です。でも、イエスが言われたことは、あなたに与えられている富を用いて、あなたがそれを人々の救いのために用いるなら、天国においてその救われた人たちがあなたを歓迎するということです。

つまり、私たちが福音宣教のために、神のみわざのために、神が託してくださったものを犠牲的に用いるということは愚かなことではないのです。すばらしいことなのです。皆さんが喜んで主の働きのためにささげ物をささげること、皆さんが喜んで犠牲的にいろいろな働きのためにささげること、そのことを通して人々の前に福音が広がり、イエスを信じる者たちが起こされていく、そして、その人たちが「あなたはすばらしい働きをしてくれた」と言ってあなたを歓迎をすると言うのです。皆さん、私たちは何もできないのではありません。できることがたくさんあります。これまで見て来たように、私たちは祈ることが出来ます。同時に、私たちは主が私たちに託してくださったものをこのような福音宣教の働きのために犠牲的に用いることによって、私たちは天に宝を積んでいくということです。それこそ永遠に価値ある使い方だと言うのです。

そして、イエスはそのことを教えて、10節からこのように記されています。「10 小さい事に忠実な人は、大きい事にも忠実であり、小さい事に不忠実な人は、大きい事にも不忠実です。」「小さい事」とは、今私たちが見ているように、託されている様々な財産やお金のことです。イエスは、託されたその小さいものもあなたが忠実に神のみこころに沿って用いていけば、神はあなたにすばらしい報いを与え、同時に、あなたにより大きなこと、価値あるものを任せてくださると言うのです。なぜなら、あなたは小さい事に忠実だったからです。覚えておられますか？マタイの福音書25章に記されていますが、主人が三人のしもべたちに5タラント、2タラント、1タラントを預けました。5タラントと2タラントの二人はそれでもうけて主人の前に出て行きます。そこで主人がこう言います。21節と23節に『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』と。主はあなたに富を託してくれたのです。もし、あなたが主の前にそれを正しく用いるならば、もっと大きな働きをあなたに与えると言うのです。しかも、あなたが天に上がったときに、あなたのその犠牲によって働きによって救われた者たちがあなたを歓迎するだけでなく、主ご自身があなたのその忠実な働きに対して褒美を与えてくれると言うのです。

なぜ、小さな事に忠実でない人に大きな事を与えないのでしょうか？それは小さいことの方が実現可能だからです。それに不忠実な人は、つまり、神が託してくれたものを神が喜ばれるように用いていなければ、報いも少ないし、この地上で得る大きなものを神はあなたに託すことはないと言うのです。12節にも「また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。」と書かれています。ここにも「他人のものに」とあり、あなたが持っている富はだれのものかをまた明らかにしているのです。「あなたは他人のものを持っている」と言うのです。確かに、実際にあなたが働いてあなたが得たものかもしれない。しかし、助けを与え力を与え、そのような機会を与えてくれたのは神です。神があなたにすべてのものを託してくださったのです。だから、イエスは「他人のもの、主のものを、わたしはあなたに託した。それに忠実でなかったら、どうして神はあなたを祝福するのか？」と言うのです。

ハガイ書2：8に「銀はわたしのもの。金もわたしのもの。——万軍の主の御告げ。——」とあります。私たち信仰者が覚えなければいけないことは、私たちが持っているすべてのものは私たちの私物ではない



のです。すべて主のもので、すなわち、先ほども話したように、私たちはすべてのものを主の栄光のために用いることです。もし、あなたがそのためにあなたに託されているものを用いるなら、それが財産であろうと時間であろうとあなたの才能であろうと、すべてのことを主の栄光のために用いるならば、あなたは主によって祝される、あなたは天に宝を積むと言うのです。

このルカ 16 : 13 で「13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。」とあります。「どちらに仕えるか？」が問われているのです。あなたの持っているもの、あなたの富は神のもので、神のために用いなさいと言います。ですから、信仰者の皆さん、主があなたに与えてくださっているものを喜んで主におささげして主の働きのために、そして、福音宣教のためにあなたが喜んで犠牲的にささげるなら、それらはすべて天に蓄えられることになるというのです。そのために主があなたにそれらを託されたことばが教えるのです。

#### **結論**：

私たちは今日、ローマ人への手紙で「聖徒の入用に応じて行きなさい」と見ました。私たちの周りにそのような人がたくさんいるでしょう。その人たちの必要に応じて行きなさい、必要を満たすために喜んでささげる、それが物質的な必要であり、救いという霊的な必要であっても喜んで犠牲的にささげなさいと言います。面白いのは、これはごく一部の人だけに命令されているではありません。すべてのクリスチャンたちに言っているのです。つまり、みな必要を抱えています。こんなご時世ですから、必要のある人でいっぱいです。いろいろな必要を抱えています。でも、大切なことは、自分の必要が満たされることを求める前に、人の必要に応じて行こうとすることです。私たちはまず自分が満たされなければならぬとします。だから、いつまで経っても満たされないし、心も満たされない。みことばが教えたことは「聖徒の入用に協力しなさい」です。ある人はこのように言われます。「でも、私はささげるものがありません。だから、私にはできません。」と。私たちがよくやってしまう失敗は、先ず、自分の必要を考えて、先ず、自分の必要を取っておいて、そして、その残りから神にささげようとすることです。それでは残念ながら何も残りません。でも、今私たちが見て来たように、学んで来たように、すべて神が私に託してくれたものであるならば、私たちがすることは先ず神におささげすることです。

もう一度、先ほど私たちが見たルカ 12 章の「愚かな金持ち」の話の中で、21 節には「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」とあり、イエスはこのたとえを話された後、弟子たちに教えて行かれます。22-34 節「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。：23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。：24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。：25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。：26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。：27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。：28 しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるので、ましてあなたがたには、どんなによくして下さることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。：29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。：30 これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたがたの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。：31 何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。：32 小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。：33 持ち物を売って、施しをしなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることはありません。：34 あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。」

なぜ、このような話が続いていくのでしょうか？皆さんもよくご存じのように、マタイの福音書にも「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(6 : 33) とありますが、なぜ、このようなことが言われているのでしょうか？つまり、あなたの必要は主がちゃんと満たしてくれるということです。私たちが心配しなければいけないことは、神が託して下さったものを神のために正しく用いているかどうかです。それが私たちの責任なのです。神の責任は「あなたの必要を満たす」です。私たちの責任は「与えられた物を用いて人々の必要を満たして行きなさい。神の働きのために使っていくなさい。」です。私たちは神がすると約束されたことを自分の力で一生懸命やろうとします。自分で自分の必要を満たさなければいけないというのです。しかし、これはみことばが教えていることではありません。私たちが考えなければいけないことは、先ず、

主のみこころがなされるために主が託してくださったものを用いていくことです。

パウロはこのローマ人への手紙の12章1節から、私たち信仰者は神によって救われたことをいつも覚えて、感謝をもって生きていくようにと、その具体的な生き方を教えて来ています。感謝が心の中にあるならば、それは確実に具体的に形となって外に出て来ます。あなたのうちに感謝があればそれは確実に形となって出て来るのです。イエスは人のうちにあるものが外に出て来ると教えました。マケドニヤのクリスチャンたちのことが記されています。彼らがどのような状態にあったのか？Ⅱコリント8：2-3に「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。：3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、」とあります。彼らは非常に貧しかったのです。「極度の貧しさ」と書かれています。我々が経験したことのないような貧しさです。そのような中であって、彼らは「あふれ出て、その惜しみなく施す富となった…いや力以上にささげ、」と、つまり、大変な犠牲を払ったということです。なぜ、そのような行為ができたのでしょうか？書かれています。「彼らの満ちあふれる喜びは、」と。それがそのような行為をもたらしたのです。

つまり、すべて「心」なのです。私たちの心が主への感謝に溢れていたなら、私たちは喜んでその方のためにささげようとするからです。我々の心が喜びに溢れていたなら、困っている人たちのために助けようとするのです。あなたの心が主の前に感謝に溢れていることです。主が何を為してくださったのか、しっかりとその救いのみわざを覚えて、願わくば、あなたの心がその喜びに溢れ続けること、そのことを願うことです。なぜなら、そのときに神が喜ばれることをあなたは実践しようとするからです。喜んでささげようとするのです。そして、あなたは天に宝を積むのです。兄弟姉妹たちの必要にあなたが応えようとするのです。そうして、あなたは愛を明らかにするのです。

#### 10. 旅人をもてなさない

この「もてなす」ということばは、旅人や他国人をお客として迎える、もてなすということです。なぜ、このことが言われているのでしょうか？当時は、宿においていろいろな問題、いろいろな危険があって、また、実際に宿の数も少なく、料金も高かったのです。そこで多くのクリスチャンたちは旅人のために自分たちの家庭を開放したのです。パウロは言います。「そのように旅人のために、あなたがその人を知らなくても、彼らがイエス・キリスト信じているなら、特に、そのような人たちのためにあなたの家庭を開放してあげなさい。」と。「どのような人であっても、その人たちを迎えてあげなさい。」と。これもキリストの愛を形をもって示す行為です。

このようなことを実践して大きな祝福をいただいた人たちは、この中にもきっとたくさんおられると思います。私たちもかつて子どもが小さいときにいろいろな人たちに来てもらって、主がどのようなみわざを為しておられるのか、たくさんのお話を学びました。

パウロは私たちにどのように愛を実践するのかを教えてくださいました。兄弟姉妹の必要に応じて行きなさい、彼らをあなたのところに迎えてあげなさい。彼らをもてなしてあげなさい。あなたの大切な客として迎えてあげなさいと。そうして、私たちは主から与えられた恵みを分かち合っていくのです。多くの皆さんがそれを実践なさっておられます。主が皆さんのことを豊かに祝してくださるようにと願います。益々そのように歩んでください。この地上に宝を積むのではなく、天に宝を積む者として。そして、主があなたに与えてくださったすばらしい愛を具体的に実践する人として、キリストの愛を証する人としてどうぞ歩み続けてください。

そうして、私たちはこの世の中の人々に、私たちの主は私たちを愛して、そして、私たちをこのように生まれ変わらせてくださったと、私たちの神を世に明らかにしていくのです。主の証し人として、主の愛を証する人としてこの一週間も歩んでください。

#### 《考えましょう》

1. 主は何のためにあなたに金・財産を託されたのでしょうか？
2. あなたは天に宝を積むことを願っておられますか？
3. 天に宝を積むにはどうすれば良いと聖書は教えていますか？